

二十・十一・上　チタの山の中ナリーム収容所千

名、近くのジンブルカ収容所五百名に分かれる。

ジンブルカは河のへりで冬は伐採、夏は流木をしていた。白井氏はジンブルカ組であった。

最初の冬は、ソ連兵の糧秣の横流しで（後日司令部の調べで判明した）食糧事情が極度に悪く、約三割の人が死亡した。

作業は、周囲の山を切り尽くして、後では五キロも遠くまで出かけるようになった。

昭和二十三・十一・二十　ようやく信洋丸にて帰国

復員後、保健所、税務署、農林技官、警察等の公務を受験したがすべて不採用となる。

昭和二十八・七・一　小学校教員に採用され、以後教職に精励する。

昭和五十九・三・三十一　三十有余年の教職の任務を終え、退職

本人が常に語っているように、よき妻子に恵まれ、悠々自適の老後のつもりであったが、世間が許さず、教職会の副会長として多忙な傍ら、町内会長等を経て、

警察の防犯推進委員等々老骨に鞭打ちながら、今ではできる限り社会に貢献し、社会にお返しをして、併せてシベリアの同志の死をむだにせぬようにと頑張っている毎日のようであります。

（熊本県　高瀬　潤吉）

シベリア抑留者の手記

千葉県　奈良　光雄
（旧姓　印　藤　三　夫）

武装解除のころ

阿城重砲兵連隊第五大隊に属していた私たちの部隊は、本来東部ソ満国境にあつて敵トーチカを破壊し、友軍の敵陣突破を開くことを任務として①と称し、口径三十センチの長榴弾砲を有し東部国境に駐留していたが、昭和二十年ころ戦争の状況も悪くなり、逆に敵戦車の侵入を防ぐ任務を持つて牡丹江東方の鏡泊湖付近に展開してソ連軍との開戦を迎えることになった。

八月十五日戦争は終結の命令により、八月二十日過ぎのころだと思うが、敵軍と直接の接触を避けるため、主要道路を避け、いわゆる「雲ガクレ」なる名のもとに山中に部隊を集結していたところ、敵の戦車部隊の搜索隊の者若干名と遭遇し、一瞬全員緊張し、中には血気の者、名越中尉（早大角力部主将）ら、こんな少人数の敵は殲滅すべきと言う者もあったが、そのころ私はハルビン特務機関の隷下で露語教育を約二年修業し帰隊したところであつたので、ソ連将校と交渉に当たり事なきを得て、直ちに武装解除をして帰国の途につくべしとの通達で、とにかくにも平穩に事の收拾を得たことは部隊にとつても幸いであつたものと思われるが、苦勞して覚えた露語をこうした結末に使わねばならぬ口惜しさにしばし涙が止まらなかった思いが今も残る。

その後部隊一同は湖上を輸送船で基地（北湖頭）に到着するや、基地を管理していたソ連工兵隊長に、通訳は現在地に残り、部隊のみ出発せよとのことで、親しき戦友たちとも別れ、若干の当番兵たちと、輸送船

で湖上を運航していた中山大尉の独立船舶中隊と合流して、ソ連軍の使役を約三カ月、十一月の末ごろまで現地で物資の収集に当たり、日本軍の用意した、兵器装備品、食糧品その他あらゆるものを洗いざらいに集めては彼の地に送ったようで、勝ったソ連兵の粗末な服装に引き換えて、日本軍の方がずっと豊富な物資があつたのが不思議にも思われた。

そのころ、西大泡なところに備砲された我がⒶ砲を彼らが戦利品としてモスクワの赤の広場に飾るとの申入れがあつたが、分解、運搬がとても困難でできぬことをいろいろ説明し、ようやく彼らも納得し破壊することになり、我が手で、大切に守ってきた我が砲にダイナマイトを詰め爆破し、我が軍が誇つた巨砲も見ると哀れな姿と化してしまった。

やがて外気も寒さが加わつてきて物資の収集も一応終了し、船舶兵たちと共に牡丹江の收容所に送られたが、今までとは余りにも違つた收容所内の兵士たちの姿には、しばらく啞然とするほど惨めな姿であり、ただ驚いた。それまでは黒パンなどは見向きもしないほ

ど不自由な生活であつたが、せっかくの配給品であるから^{かま}臥に入れて持つて行つたが、たちまち大勢の人たちに分けられ、顔は真っ黒、着衣は汚れ切つて、中には南京袋を羽織つてゐる者さえあつて、目ばかり光つてゐるように見えたが、自分たちも程なく同じような姿と化したわけであつた。

シベリアへの輸送

「トーキョー、ダモイ」と一兵士に到るまで徹底して日本兵に対し欺瞞の宣伝を行つたソ連軍上層部からの命令にすっかり乗せられて、一同は一途に日本に帰還できるものと、一梯団千人単位で汽車（貨車を二段寝台）に区切つて、一両約四、五十人ぐらゐずつ詰め込まれて牡丹江を發し、一路ウラジオストクへ向かうはずのものが、逆にハルビンから滿州里方面の西に向かつていたため、ハルピンを過ぎたころ不安を生じた兵士の中で、三、四人ひそかに脱走をした者が出たので、警戒兵（カンボーイ）たちは大変な騒ぎとなり、貨車を全部針金で外側から縛り上げ、中の者は一步も外に出られぬようにしてしまい、用便はもちろん、食

糧も水も与えられず、私が外を連絡に歩くと、貨車の小さな隙間から悲鳴にも似た声で「水をくれ」と叫んでいる姿がこの世の地獄かと思われるようで、強く彼らとの交渉に当たつたが、彼らは自分たちの任務以外は全く関知せず、止むなく各貨車に食糧を現物で配り、中の小さな暖炉の上で飯盒で煮て辛うじて飢えをしのいで、約二十日余りの輸送は文字通り生き地獄のようであつた。

途中、バイカル湖はさすがに大きなもので、まるでどこかの海に着いたような感じで波が海岸のように押し寄せ、きれいな水をたたえていたことが印象に残つた。

やがて夜中に、見渡す限り白銀の雪の広野の中に下車を命ぜられ、これが我々の目的地の第五收容所、バム鉄道と称する第二シベリア鉄道のタイセツトより五つ目の收容所であり、收容すべき建物とてなく、二重に張り巡らした鉄条網に囲まれた中に天幕が十個ほど並んでいたのが我々の住居となつた。

酷寒の中、天幕の中に小さなドラム缶を切つたスト

ープで薪を燃やして暖を取るのだが、外は零下三〇度以下、天幕の中も零下五〜一〇度ぐらいで防寒具一式を着けたまま眠るのだが、顔のまわりに自分の吐く息で真っ白く霜が降り、着のみのまま、軍用毛布一枚が支給され板の間にごろ寝となり、実に極悪の環境でたちまち衰弱者が続出する状況であった。

森林伐採作業

第五收容所は主として鉄道建設に伴う用材調達に当たったが、果てしなく続く松の原生林で、長さが三十メートル余りに達する見事な松の林が続いている。我々は伐採には全く経験のない者ばかりで、三人一組となり、二人で使う鋸と手斧で枝を切る者と組んで作業するわけだが、一個中隊は約百名ぐらいで、警戒兵が五、六人つく。監督は作業を捗らせるべく「ダワイ、ダワイ」と盛んに叱咤するし、警戒兵は作業とは関係なく、脱走者を出さぬことにのみ専念するので、両者の間にはしばしばトラブルが起きていた。

シベリアの夜明けは遅く、朝真つ暗の中をたたき起こされ、光明とてない中で雑穀も肉も魚も一緒にした

雑炊を啜り込み急いで出発するわけだが、動作は至って緩慢だ。朝八時にまだ真つ暗の中を狩り出され、前後を銃を持った警戒兵に「ダワイ、ダワイ」と叱咤され現場に向かう。彼の国にはノルマと称する作業量の標準が決まっていて、熟練した者を基準とされているので、我々のような初めての人には一〇%も達成できないので彼らは焦って、そのころ、ノルマのできない者は基準に従って食糧を減らすようなこともあり、ますます仕事にならない。栄養失調で倒れる者も続出し、余りの空腹に耐えられず、松の木の甘皮を剥いて何度も煮こぼして支給される食糧に足して食した者もあったが、その人たちには栄養失調が進んで死亡した者が多かった。

また、作業中倒れる木の下敷きになったり、倒れる木の枯れ枝が白樺の木にはじかれて頭に当たって死んだ者、また座って鋸を使って避けそこねて両足が巨木の下敷きになった者などなど、作業に伴う事故の発生もこの頃が多かった。

反動分子の集結

そのころ、通訳としてソ連側といろいろ交渉したときに強く要求もし、又は反発もあつたためか当局ににらまれ、要注意者とマークされ、仲間同士にもスパイまがいのことをする人も出ていて、あるとき、突然単身で別の収容所に移された。

そこは三つほど離れた第二収容所という所で、収容所の中に更に囲いを設け一般の兵士と区別されて数人いたが、中には軍の経理部長であつた西村大佐や氣骨の溢れる猿渡少佐、一部には七三一部隊の軍医だった人たちなど、一クセも二クセもある連中を集め、収容所の中も出られず食事も運んでもらう不自由な生活でありながら、作業（主として土木）には狩り出されていた。

そのころ、例の七三一部隊の話や、憲兵、警察の話など物珍しく聞いたものであつた。

そのころ（昭和二十二年）、シベリアの収容所では民主化運動なるものが盛んになり、共產主義思想を盛んに奨め、反動といわれる人たちや将校連中が、民主運動の邪魔になるため一カ所に集められたので収容所

の中も仲間がだんだんと多くなり、しまいには全部が将校や危険分子などの集団となつた。相変わらず作業には狩り出され、森林伐採も慣れてきて、私も渡辺中尉と組んで負けず嫌いを発揮して、いつもノルマ百%以上を達成しておつたところ、優良作業員とおだてられ、中隊を指揮するようになり、やがて民主運動の推進員として作業を免除され、毎日マルクス主義の本など読んで暮らしたこともあつたが、余りにも不本意な生活で面白くなかつた。そこもやがて大部分の人たちの移動があり、イルクーツクの鉄工場のある収容所に転属となつた。

イルクーツク鉄工所にて

イルクーツクの収容所は規模も大きく設備も整つていて、楽団等が編制され我々転属者を音楽を吹奏して迎えてくれ、驚いた。食糧も日本人が自主的に管理するので調理も良く、やや人間らしい生活となつてきた。

鉄工所の中は溶鉱炉や、圧延、溶接、旋盤などであり、日本人は器用で技術が良く、ノルマの倍も能率を上げ、給料をもらつて贅沢な生活をする者もあつたが、

あるとき、圧延炉の夜勤に出て二人で組んで一晚中石炭をくべる仕事で、のんきで楽なものだと喜んでいたところ、朝方になり交代前に監督が出て、燃えかすの灰を掃除するように指示された。炉の下に入り灰を出すわけだが、狭い所で前も後も熱い灰の中で、まるで灰神楽の中の作業で、一回でこりて、これを一晚で謝ったことも笑い話として思い出に残る。

そのころ収容所の中は民主運動が盛んで、毎夜のようにならざる集會が開かれ、反動分子の摘発やつるし上げなどが行われ、日本人同士のいがみ合いがあり、旧來の階級は無視され、幅のきく者が民主化を唱えており、某中佐らがその者たちに追隨していたのも情けなく思われた。

中に三人の將校は作業を拒否し毎日部屋で休んでいたが、全員の集會が開かれ壇上に立たされ、例のつるし上げが行われ、「皆はスターリン万歳と言うが、スターリンとて敵の首魁である。利敵行為の作業は断固断る」と氣骨の溢れる口上に一同啞然として声も出なかったが、ソ連の政治部將校が「お前は今どこにい

るかを考えろ、生きたまま日本には帰さぬから」とおどし文句で集會を終わつた。間もなくその人たちの姿は収容所から消えたが、早々と帰還できた？らしく、ソ連流の役に立たぬ者は早く帰らせ、一生懸命働く者を長く使う方策らしかった。

その収容所も約十カ月くらいで、今度は炭坑のあるチェレンホーボに移った。

炭坑の町で

そのころになると、移動も簡単で所持品として何もなく、文字通り着のみ着のままの転属で、行く先で衣類などは支給されたのであった。

チェレンホーボは石炭の露天掘りが行われ、地下十数メートルの所に厚さ十メートル余りの石炭の層があり、それを掘るため地上の土を爆破し機械で除去する仕事で、その手元で凍った土塊を破碎するため、鉄棒を赤火で焼いてハンマーで大きな土塊に打ち込んでダイナマイト等で爆破する仕事などを主としてやっていたが、間もなくそこも引き揚げて、仲間たちはだんだんと内地帰還が行われ、自分の順番の来ることをひそ

かに心待ちする日々であったが、一向にその気配もなく、今度もまた移動であった。

ハバロフスクにて

だんだんと東の方に収容所が変わってくるので、心ひそかに帰還への望みを期する者もあったが、今度はハバロフスクという所だ。着いた所に西田某なる通訳がおった。彼とは最初の収容所で約二年近くも一緒にあったので、久しぶりにお互いの健在を喜んだが、彼の言うところによれば、これも戦犯の容疑のある者を集め、日本への帰還は延ばされるらしいとのこと、一縷の希望も断たれ暗澹とした思いに暮れていたが、そのころやはり政治部員から時々呼び出しがあり取調べを受け、主として前歴の調査や部隊のことなどで、大したものではなかった。

ここでの作業は雑多で、ウスリー河畔の船着場で船の修理、特に船底のペンキはがしには、目の中にゴミが入りまいった。また電気溶接の手元では知識もないので、例の強い光線ですっかり目をやられ一晩中悩んだこともあり、また建築のブロック積みやモルタル仕

上げの仕事では、素人の私にうまくできるわけもなく一遍でお払い箱となったが、木工の仕事は前の収容所でも少し経験もあり、鉋で削り仕上げるのを見て監督が感心し、「お前は長く技術者をやっていたので腕が立つから今度から班長だ」とおだてられ、仕事も簡単で楽な方へ回された。

内地帰還への途

昭和二十五年が明けて、酷寒のシベリアも春ともなればだんだんと雪と氷が溶けて春らしい息吹を覚えるようになり、三月の末ごろと思うが、いよいよこの収容所も引き払って全員日本に帰還するとのこと、収容所の中にもわかにざわめき、生き生きとした空気が溢れてきたが、何度も移動を繰り返し、その度だまされてきたので、絶対の信用はできず不安を覚えた。

しかし、その後は順調にナホトカに着き、一週間はど待っていると引揚船がきて、夢にまで見た日本への帰還がやっと現実のものとなり、船に懐かしい桜の花が飾り付けられ、タラップを踏んで乗船できた感慨は一しお深く、涙が止まらなかった。

五年に余る強制抑留の生活を終わり、無事日本に帰ることができ、幾多の苦難はあったが、幸いに健康に恵まれ、大きな事故にも遭わず、今日平穩に日を送ることのできるのを心より感謝している。

シベリア強制労働抑留記

長野県 澤 上 定 男

明治四十一年十月五日出生。長野県上伊那郡高遠町西高遠町に生まれ、高遠町尋常小学校六年修業。家族は妻との二人。子供三人は全部独立生計を営む。

高遠町分町当時、国策の満州開拓団先遣隊長として、昭和十六年十月渡満し、満州成吉思汗地区に入植する。終戦時は団員、家族二百九十五人であった。

昭和二十年五月、現地召集を受けハイラル部隊に入隊する。入隊後間もなくソ連との交戦となり、参戦する。興安嶺地区にて陣地構築輜重兵。

装備は小銃三人に一丁、銃剣のサヤは竹であった。

開拓団では、若者は次々と召集され、団は老人、婦女子のみとなる。私の軍籍は補充兵です。開拓団の責任者であり、召集はないものと思っていた。開拓団員は戦争は勝つことのみを信じ、ただただ国のため食糧の増産に励んだものであった。

戦闘状況は、日本にはない大型の戦車で、これが何十台とも思われる大戦車隊である。車上には多くの兵隊が、日本にはないと思われる自動小銃を装備し、車上からところかまわず発射し、日本軍は湿地の中に逃げ込み身を守ったが、ソ連の乗馬隊はこの湿地の中まで入り込み、日本兵の姿は見えないと思われるのに自動小銃を乱射し入ってくるので、姿の見えないように湿地の中の溝の中に腹ばいになって、身を守ったが、何人かの兵隊は死んだと思われる。

ソ軍部隊の通り過ぎたところを見計らい道路に這い出て、あてもない地に向かって進んだ。

終戦の詔勅は、八月二十五日ウヌールで、特別の報告があると上官からの命令伝達があり、何事かと思つたら終戦の詔勅であった。満州開拓民であり、勝つこ